［翻　　訳］

モリス・フィッツパトリック著

聖コルンバの申し子たち（1）

市 川　　仁
ジョン・ドーラン

翻訳にあたって

本稿は Maurice Fitzpatrick, *The Boys of St. Columb's '... They would banish the conditional forever, this generation ...'*（The Liffey Press, 2010）のうち Introduction、History/Background、Profiles of the Participants、Edward Daly の章を訳出したものである。

著者のモリス・フィッツパトリック氏はダブリンにある大学トリニテイ・カレッジの大学院を卒業し、2004年にラフカディオ・ハーンの研究で日本の文部科学省の奨学金を受けて来日し、慶応大学や立教大学などで講師として教えた。2008年に『聖コルンバの申し子たち』を執筆し、RTÉ（Radio Telefis Éireann: アイルランド放送協会）と BBC（British Broadcasting Corporation: 英国放送協会）による同じタイトルのドキュメンタリー映画の共同製作に携わった。この映画は2009年のゴールウェイ映画祭で初上映され、続いてロスアンジェルス・アイルランド映画祭でも上映された。またボストン大学の後援により、米国とカナダでこの本について巡回講演を行ってもいる。

北アイルランドの紛争の歴史について語る本は数多くあるが、原書のタイトルが表しているように、聖コルンバという学校で教育を受けた子どもたちが、北アイルランドのカトリック教徒の解放の大きな起爆剤となったという視点から書かれた書物はおそらく他にないであろう。さらにその主導的役割を演じた八人――「プロフィール」の章で具体的に理解できるように、ノーベル賞受賞者を含めいずれもアイルランドを代表する著名人たち――に直接会ってインタビューをし、歴史の証言を引き出していることは特筆すべきことである。八人の証言はアイルランド問題について多くの示唆に富んでいる。

ところで、2011年５月にエリザベス女王が王として初めてアイルランドを訪問した。これは今なおくすぶっているアイルランド問題解決の一助となるような歴史的な訪問でもあった。女王のスピーチの中でアイルランドに対する正式な謝罪が行われたとは言えないまでも、アイルランド問題に対する配慮の言葉や、復活祭蜂起の記念碑などへの表敬は、アイルランドの多くの国

民に理解されたようにも思われる。もちろん複雑な思いを持つ人たちも少なくないであろうが。

アイルランドが英国支配のもとで苦しんできた歴史は長い。だがその歴史の中で、1916年４月24日の復活祭の月曜日、アイルランド義勇軍が中心となって大規模な反乱を起こした。パトリック・ピアスはダブリンの中央郵便局で「共和国宣言」を読み上げ、蜂起は一週間続いたが、英国軍に鎮圧され、最終的に16人の指導者が処刑された。これは英国政府の支配に対する大きな反抗であり、また初めて処刑を経験した反抗でもあった。その後、さまざまな事件を経ながら、アイルランド島全32州のうち南の26州が南アイルランドとして独立したのは1949年であった。復活祭蜂起から30年以上にわたる反抗と独立に向けた運動の結果である。そしてそこからさらに20年近く後の1968年８月24日、北アイルランドで初めての公民権要求のデモが始まった。それが同年秋の10月５日にデリーで行われたデモでは王立アルスター警察隊との衝突にまで発展する。そしてその夜ボグサイドで暴動が一気に爆発した。その後ベルファストのクィーンズ大学の学生を中心として公民権運動はさらに勢いを増してゆく。そしてこのようなデモの起爆剤になったものこそ1947年の教育法であるという。これを中心として八人へのインタビューが行われた。ここで紹介されている八人はその法が可能にした教育を受けたまさに第一世代であった。

なお原書の構成は以下の通りである。原書には章番号はふられていないが便宜上つけておく。1. はじめに、2. 背景･歴史、3. プロフィール、4. エドワード・デイリー、5. ジョン・ヒューム、6. シェイマス・ヒーニー、7. シェイマス・ディーン、8. イーモン・マッカーン、9. フィル・コウルター、10. ＩＲＡ義勇兵の証言――シェーン･ポール･オドハティ、ジェイムズ･シャーキー、11. インタヴュー――ジェイムズ・シャーキー、イーモン・マッカーン、ポール・ブレイディ、フィル・コウルター、12. ポール・ブレイディ、13. インタヴュー――シェイマス・ディーン、シェイマス・ヒーニー、14. おわりに。さらにこれに付録として映像化されたときの台本の構成がついている。

はじめに

本書で扱っている八人の中には友人としてつき合ってきている人もいれば、同僚としてやっている人もいる。また互いにほとんど面識のない人もいるし、知り合って以来いまだにむずかしい関係を続けている人もいる。彼らはみな1933年から47年の生まれである。そしてみな北アイルランドで1947年に成立した教育法の恩恵を受けた人たちである。この法律によってイレヴン・プラス（11歳試験、中等学校進学適性検査）として知られている補助試験に合格した者は誰も、無償でグラマー・スクール（中等学校）の教育を受けられるようになった。彼らはみな、デリーの、カトリックの教区の男子校、聖コルンバ校に通った。従って彼らはひとつの世代を形成していると言えるし、またある意味で、同志と言ってもいい。彼らがこの学校で受けた教育は、教育という点では良質そのものであり、さらに興味深いことに、暗い戦後の時代とリベラルな60年代の二つの時代の架け橋となっている。本書が扱おうとすることは、彼らが、あの教育改革によってもたらされたアイルランドの歴史の分岐点を示すすばらしい実例となっているということである。北アイルランド全体では他の例も見られるであろうが、ここでの私の関心は、それが北アイルランド全体におよぼした影響を理解するために、（そこにこそ影響が凝縮された）聖コルンバというレンズを通してその影響を考察してみたいということである。インタヴューに応じてくれた人たちの多くが、北アイルランドの体制を「破壊した」と表現しているがそれは、北アイルランドのユニオニストの支配を緩めたということを意味している。当時の歴史の展開は、そのひとつひとつが八人の人たちの言葉を通して明らかになってくる。私の役割は、ひとつは彼らの証言の編集者であり、ひとつは歴史の編纂者であり、ひとつは語り部である。

聖コルンバの旧校舎を初めて訪ねたとき、創立時の校舎の名残を見た。正門から校舎へと続く眺めは同じだった。最上階から正門に目をやると、眺めはほとんど変わらないが、ウォール・ハンドボールのコートがバスの発着所

になっている。図書館は今でもすばらしく、螺旋状の手すりがあり、学校の三方が眺められる。主にそこを利用していたのは、布教先からカモノハシやマオリ族の盾などの手工品を持ち帰った司祭たちだった。彼らはそれをそこで調べていたのだ。今日ではゲール体育協会（GAA）の競技場はサッカー場になり、競技場は、今は学校の正面に隣接しているが、1950年代にはこの二つの競技場は並んでいた。宿舎の二階は、今は教室になっている。教会のステンドグラスと教会そのものはおおかた同じ姿をとどめている。祭壇はわずかに変わっている。学校は一方の側にカトリック・ボグサイド（カトリック居住区）を、もう一方の側にプロテスタント・ファウンテン（プロテスタント居住区）を見下ろしている。1950年代と60年代には前者はスラム街となり、後者は包囲された。聖コルンバはその二つにはさまれた狭い――２ないし３エーカー（１ヘクタールほどの）――区域だった。聖コルンバは今ではバンクラナ・ロードに移転し、ここ、創設の地は別の学校、ルーメン・クリスティ（キリストの光）になっている。

ルーメン・クリスティの校長パトリック・オドハティは、30年ぶりあるいは40年ぶりに聖コルンバ校の創設地に帰ってきた元生徒たちを数多く案内してきている。彼らの反応は歴然としていてあいまいなところはない。一人前の男が、強烈な記憶におそわれ、感情を抑えきれなくなって泣き出さんばかりになるか、当時の堪えがたい悔しさが一気によみがえってくるかである。反応はいつも両極端に分かれ、中間ということは決してない。

私が初めて聖コルンバの申し子たちを知ったのは、12年前の1998年だった。私が通っていたグラマー・スクールの先生が、ジョン・ヒュームがノーベル平和賞を受賞したと教えてくれた。先生はまた1995年のノーベル文学賞の受賞者シェイマス・ヒーニーもヒュームと同じ学校で学んだとも言った。先生はさらに続けて「二人は学校で教えてもらった英語の先生のことを今でも懐かしく語り合うのです。あのような二人を教えたその先生はきっとすばらしい先生だったに違いないですね」と言った。それから12年がたち、私はあの断片的に聞いた話が自分にとって何を意味するのか、それをつなぎ合わせて

みようと思う。アイルランドの最近のノーベル賞受賞者の二人が、同じ師の教えをあおぎ、人生の糧を得たことは私の脳裏から離れなかった。今では彼の名前がＳ・Ｂ・オケリーであることは分かっている。彼は多くの教え子たちの意識の中でこれまでずっと大きな位置を占めている。

大学で英文学を学んでいたときに、私はシェイマス・ディーンを読んだ。不思議なことに、デリーでの成長を描いた彼の小説『暗がりで読む』は、最初はそれほど強烈な印象を与えることはなかった。しかしさらに不思議なことに、私は何度も何度もそれを読み返したのだ。そしてどういうわけか読み返すたびごとになおいっそう惹きつけられた。デリーには何か私が探り出してみたいものがあった。そしてこの町を調べれば調べるほど、ディーンの小説をはじめ、他のこともはっきりとしてきた。

私はカトリック教徒が自分たちの置かれている立場を悟ったのはなぜか、また英国という国によって阻害されると同時に奇妙にも機会（無償の教育）を与えられたのはなぜかと考えた。アイルランド共和国の大学でルーム・メイトだったシャーキーとブレイディが60年代後期にどんなことを語り合っていたのか。クラスメイトであり同じ文学を志したヒーニーとディーンは50年代の終わりに「ベルファストに行って」クィーンズ大学で学び、どんな議論をしていたのだろうか。大学を卒業してからロンドンで有名なミュージシャンになったフィル・コウルターを駆り立てたものは何なのか。大学で教育を受けたイーモン・マッカーンとジョン・ヒュームが1960年代末にボグサイドに戻ったのはどういうことだったのか。

2007年2月、シェイマス・ディーンはダブリンで、日本のある雑誌向けの記事のために私が申し込んだインタヴューに親切にも応じてくれた。彼は自分がそれまで歩んできた人生について率直に話してくれた。そこに座って、ディクタフォンを回しながら、アイルランドの歴史についての私の質問に対する彼の答えを聞いていると、きっと、ショーン・オモーダもあの魅力的なドキュメンタリー（アイルランド帝国の）『七つの世代』を手がけたときにこの同じ場所にいたにちがいないと思った。窓越しに射し込む光は、オモー

ダがドキュメンタリーで自然の光を使った一場面のそれだった。私が座っていた建物はジェイムズ・ジョイスがイプセンについて有名な講演（「演劇と人生」1900年１月20日）をした所だった。それはナショナル・カトリック・ユニヴァーシティの創立者の名前にちなんでニューマン・ハウスと名づけられている建物である。ディーンの部屋からは、二つのとても大きな窓がイヴェア・ガーデンズに向かって開いている。セント・スティーヴンズ・グリーン・サウスは建物の反対側にある。私は彼に尋ねた。

聖コルンバにいた1950年代に、あなた方――あなた自身と、シェイマス・ヒーニー、ジョン・ヒューム（ヒュームのほうが何歳か年上ではあるが）そしてそのほかの人たち――はある世代の一部で、アイルランドはおろか国境を越えて大きな影響を与えたということに気がついていなかったと思います。でもご自身としては、ボグサイドから大学にまで行った草分けだったと感じていたと思いますが、どうですか。

そう、そういう意識はありましたね。そうですよ…。大学まで行った最初の世代でした。グラマー・スクールを無償にするという考えでしたからね――だってあの頃聖コルンバに払ったのは本代の３ポンド10シリングだけでしたよ。授業料はそれだけです。ただ14歳で働いていないということは別でしたけれど。それは、とにかく、家にお金を入れていないということなんです。まあ、デリーでは、仕事なんかないんですよ。就けるような仕事はなかったんです。ですから、学校に行ったほうがよかったんですよ。私の親は子どもをなんとか学校に行かせなくてはと思っていたんです…。そして、学校に行っているカトリックの子どもたちが北アイルランドの体制を破壊する勢力になることを本当に分かっていたんですね。10歳や11歳の自分にはあまりよく分かっていなかったんですけれど、イーモン・マッカーンにこのこと教えてもらったってことになりますかね。彼は、まあ、２年下でした。１年か２年でしたか。彼も同じ学校でしたよ。でも彼みた

いにサッカーが下手な人は見たことがないですね。ヒーニーよりずっと下手でした。私はサッカーでは一流でしたよ。だけど、放課後にサッカーまがいのことをやったものです。イーモンと私は時々柵に座って政治の話をしていました。でもしょっちゅう柵から飛び降りてサッカー場の真ん中にボールをけりかえし、それからまた柵に座り直したものですよ。本当にプロフェッショナルなサッカーと言ってもそんなものだったんです…。彼と私の親父たちは大の親友でした。彼と私はそうではありませんでした。口はきいていたし学校では顔なじみでしたけどね。なにせ、サッカーがあまりにもへたなのでつきあいきれなかったんですよ。(『アイルランド研究』、日本、第21号)

今思うと、彼のあの答えに触発されてドキュメンタリーを書くことになったのだ。それは私に多くのことを教えてくれた。まず第一に、とても情熱的で人を惹きつけるイーモン・マッカーンも同じ学校(聖コルンバ)で学んでいたということを知った。今、それが一人や二人だけではなく、当時とても優秀な少年たちの一団が聖コルンバで学んだということを知った。その世代――シェイマス・ヒーニーの言葉を借りれば「あるしるしを見た世代」――は両手で教育をつかみ取ったのだ。第二に、彼らが、能力はそれぞれ違いながらも、一緒にサッカーをやっていたということも知った。サッカー場は活動家たちが寄り集まって政治を語り合うモスクのような場だった。11歳の少年たちが社会を改革しようと語り合うことは尋常ではないかもしれないが、実際、当時はそういう時勢だった。この混沌としたるつぼから、北アイルランドのなおいっそうゆるぎないカトリックのアイデンティティの理想像が育っていった。第三に、子どもの時からアルスター・テレビのニュース報道を見て――相も変わらずどこまでも気の滅入るようなニュース番組で――北のイメージができ上がった。しかしそれはゆがんだものだった。日常茶飯事となった残虐行為を事細かに報道することにあまりにもとらわれていた。すべてがテロリズムと政治に結びつけられていたのだった――つまり国を支配

しようとするテロリストたちとそれに失敗した政治家たちを映し出していたのだ。その後、中等教育修了試験の勉強をしているとき、私は政治的な駆け引きを見てなおいっそう困惑した。テレンス・オニールがストーモントで（1965年１月）ショーン・レマスをもてなし、レマスが１か月後にダブリンでそれに返礼したのだ。私はそれをすべて意味も考えずに記憶にとどめた。しかし、このような気の抜けた大げさな政治的ジェスチャーや無惨な事件のニュース報道が教えてくれないところで知らねばならない歴史もあった。

これらの雑然とした考えはすべて分かりやすい形にまとめる必要があった。その作業が始まったのは「学校に通っていたカトリックの子どもたちの一団が北アイルランドの体制を破壊する勢力だった」とディーンに言われたときだった。こうして北アイルランドの体制は、私の心の中で、それまで私が書物で知ったものやテレビで見ていたものと一線を画すものになった。一方は海に、もう一方は1922年に作られた壁に囲まれたあの北アイルランドが相変わらず残っていた。北アイルランドは今日でも事実上分裂し、宗教隔離教育も行われている。しかし、ディーンの言葉が指したものはずっと過去にさかのぼり、1960年代後期の内紛よりも前の、彼の子ども時代のデリーに至るものだった。彼にとっての北アイルランドの体制は、あらゆる形の弾圧と剥奪で混乱状態にあった。自らに自らの憎しみを向ける社会であり、狂信的に分裂した社会だった。65パーセント以上がカトリック教徒の町であるデリーは、選挙の時にカトリックの市長を当選させることができなかった。教育を受けたカトリック教徒の時代の到来を大きな理由としてこのような事態が徐々に解消されてゆくのは、必然ともいえることだった。アイルランドがひとつの国家として統一されることよりも、むしろ我々みんなが同じ人間であるということを是とすることがユニオニズムにとって脅威となるような状態にあった。

この時代（およそ1922年から1968年）の歴史が残念なことに陰に隠れてしまっているのは、メディアが「内紛」（1968-1998）に焦点を当てすぎたからである。また残念なことに、1960年代のユニオニストとナショナリストの抗

争の原因についての分析結果が示すように、この30年間にわたる内紛は起こるべくして起こったものではなかった。攻撃と報復のあの長い戦争から私たちが学ぶことはほとんどない。そのきっかけとなった一連の事件は、むしろ州の中心部に横たわる対立と分裂を示すものである。その歴史を検証することによって初めて、当時の決定的展開の理解に向けてささやかながら貢献ができるのだ。本書がそのような歴史認識への一助になればと思っている。

教科書の歴史から生きた歴史へ、そしてアイデンティティの歴史へとたどりながら、本書の目的は歴史のゆるやかな燃焼に向き合って、思想がいかに社会を変えてきたかを示すことである。このような形の歴史は、事件と年代を記録しても社会のゆるやかな動きをほとんど評価しないもう一方の歴史――教科書に書かれている歴史――が虚偽であることを示した。質問をしてみたい。この八人が成功したのはどれほど聖コルンバでの経験によるものなのか。八人のうちの四人が学校の先生として人生を始め、若くして結婚し、なおかつそれぞれの分野でさらに先へと進む道を選んだのはなぜか。それが歴史、つまり彼らの世代の歴史だったのであり、それを私は検証しようと思ったのだ。1960年代にみなぎっていた改革の精神は間違いなくオレンジ党の社会を打ち砕く一要因であった。マスメディアもその一翼を担った。英国の誤った卑劣な治安政策もまたひとつの要因だった。しかし私が常に立ち戻ってゆくのは、1947年の教育法である。英国政府はこの権利を、それまであまりに多くの権利を剥奪されていた少数派のカトリックの人たちにも広げたのである。ユニオニストはそれを追認しなければならなかった。というのも、この法律は「本国」から来たために、受け容れざるをえなかったからである。テレンス・オニールはストーモントの議会で、ユニオニストは良い法律を「宗教論争という岩場で難破」させてはならないと訴えた。多くのユニオニストはおそらく、教育を受けたこれらのカトリック教徒は現在の制度に同化されて、体制が変わることはないだろうと期待していた。彼らはボグサイドのようなスラム街が、それほどの優れた揺るぎない知性を輩出するというようには見ていなかった。ある知識階級がひとつの世代として生まれ出て、次の世

代へとリーダーシップと自信を伝えてゆく。カトリック教徒の民衆は、時に挫折を味わうことがあっても、勉強を続ければ誰でも新たな世界を垣間見ることができた。知識階級はそれまでカトリック教徒が運命として耐えていた冷酷な弾圧を受け容れようとはしなかった。

国境のある国に育った私は、南の人たちが分裂ということにあまりに無関心であることにがく然とした。共和国では、どの世代でも、北を「よその国」と感じる傾向がますます強くなっている。「紛争」が終結したにもかかわらずこの傾向は弱まってはいない。二か国間の疎隔は深まるばかりである。南の若者にリマバディやバリマニーがどこにあるか聞いてみるがいい。おそらく彼らは知らないだろう。だが、北にあるということは知っているであろう。このような疎隔が見られるのは、アイルランドの分裂状態を南の大多数の人びとが無意識のうちに受け容れている結果なのである。

私がこのような歴史と取り組むようになったのは、これといった表向きの理由があったわけではない。私は国境の「向こう」側 2 マイルの所に生まれた。デリーは私の町ではないし、日本に居を移すことでアイルランドとかなり距離を置いているので、私がこの研究を始めたことは人生における意外な展開だった。（私はあのハムレットの当惑、「ヘカバのためにあんなに泣いているとは、彼にとってヘカバとは何か、あるいはヘカバにとって彼は何か」を思い出す。しかしヘカバであるデリーはこの 2 年間昼も夜も私の脳裏から消えることのないテーマだった。）デリーの歴史と先駆者たちの人生の軌跡は日本の社会構造と何か類似性を持っている。日本は、江戸時代（1600-1867）、ピラミッド形の厳密な階層社会だった。一番上に殿様、それから武士、農民そして一番下に商人がいた。学校や大学が西洋思想を受け容れ、地租改正が社会構造を変えたのだ。聖コルンバを研究しているうちに、私は無意識のうちに、私が理解していた飛躍的に近代化を成し遂げた近世日本の社会構造をあてはめていた。

私は日本の歴史を北アイルランドの歴史の視点から読んだのだが、1947年以前のあまりに前近代的な北アイルランドだった。確かに日本の歴史を読む

と、近代化が、北の状況を示唆するような戦争や遷都を引き起こして、封建制度の慣例を心底揺るがすような衝撃を与えたことが分かる。一方、1947年の教育法施行以後、北の二つの社会はどういうわけか似たような緊迫した対立状態を示してきている。抑圧されていたカトリックの人びとは、教育によって平等を確立しようとしたのだ。権力を握っていたプロテスタントの人たちは、この挑戦に衝撃を受け、動揺を感じた。だが、日本に近代化が訪れたときに見られたように、断固とした反対がありながらも、より公平な社会に向かう流れを逆戻りさせることはできなかった。

南は、1921年に植民地支配を払いのけ、特定の権利を当然のものと考えるようになったが、北ではそれは勝ち取らねばならないものだった。これはイーモン・マッカーンの（『戦争とアイルランドの町』）の中で少年時代のボグサイドのアイルランド語（ゲール語）の先生の話で描かれている。この先生はベルファストで自分の国の言葉でしゃべったことを罪とされ、裁判も受けずに拘禁された。母親の葬儀のために最後には釈放されたが、その後永遠に北を去ってしまった。デリーは四つの手足のうちの三つがドニゴールに向いている町で、ドニゴールが代表する古い文化と密接につながっている。今日でもデリーでは、ドニゴール・アイリッシュ・バラッドがよく演奏される。だが、たとえば聖コルンバで、ボグサイドの住民が境遇の似たドニゴールの住民と出会うと、彼らはそれぞれの政府が彼らの間に無理矢理にくさびを打ち込んでいることをまざまざと思い知らされる。ドニゴール出身の寄宿生は、南から来ているので聖コルンバの授業料を払わなければならなかったが、民族の違いで政府に敵視された経験はなかった。彼らは祖先の言語を教えられたが、デリー市に住む少年に会って、警察によくいじめられながらも、すばらしい社会福祉制度の恩恵を受けているということを知った。ドニゴールの文化の受け止め方はデリー市の人びととドニゴールに生まれ育った人たちとでは多くの場合二つのまったく違ったものであった。

私はいつも、個人の才能の源をそれが生まれてくる時と場所から読み取ることに大きな関心を持っている。2005年にアンソニー・クローニンにインタ

ビューをしたとき、私の質問のひとつは、『アイリッシュ・タイムズ』のコラムニストを勤めた1970年代から1980年代という時代についてであった。彼は私にこう語ってくれた。

私がナ・コパリーンについて書いた本のタイトルは…

『人生と時代』。

そう『人生と時代』。それがその本の重要な視点だと思っているからだ。君のたくさんの質問は、モリス君、たとえば、時代が作家に与える影響力についてだが、私はそれを読者にはっきり伝えたいと思っている。（『アイルランド研究』、日本、第20号）

ある特定の時と場所を扱った『聖コルンバの申し子たち』に取り組んでから私が多く学んだことは、自分の関心の的となっているある時代の本質をいかにとらえるかということだった。本書に登場する人たちが個々の才能を持っていたということは言うまでもないが、自分が受け継いだ国の苦悩を克服しようとすることで、その才能が十分に成熟したのだ。

ドキュメンタリー『聖コルンバの申し子たち』の監督トム・コリンズに初めて会ったのは東京だった。2008年２月に東京で北アイルランド映画祭が開催された。それで委員会は、トムの大成功をおさめたアイルランド語（ゲール語）の映画『王たち』の宣伝のために、トムを招待したのだった。翌日、私は彼を、いささか右がかった東条大将などの軍人が祀られていて、東京で論争の的になっている靖国神社に案内した。その年、後に彼とたまたまドキュメンタリーのことで腰を落ち着けて話をしたとき、私は――主義・信条にこだわるあまり、結果的に自分と関わりのある人びとに悲劇をもたらす女性を描いた劇――『アンティゴネー』のテーマに、ドキュメンタリーに出演するうちの何人かが強い関心を示していることを指摘した。それはまたフィール

ド・デイ・プロジェクトとも密接な関係があって、その監督のうちの二人――シェイマス・ヒーニーとシェイマス・ディーン――もそのドキュメンタリーの顔ぶれとなっていた。トムは『アンティゴネー』を視覚的にもまたテーマ性の点でも可能性があるということで気に入っていた。それは民族的であると同時に神話的でもあった。ディーンは『アンティゴネー』を北で起こっている状況、つまり北そのものが舞台となった時の戯曲化、として読んでいたのだった。ヒーニーは、1968年10月5日にデリーで行われた最初の公民権運動のデモ行進についてのコナー・クルーズ・オブライエンの評論が出版されると、登場人物アンティゴネーが箱の中から飛び出した、と言った。それまで彼女は古典劇の登場人物だったが、今やオイディプスの娘であるのとまったく同じように、デリーの女性でもあった。つまり「それはプロパガンダの劇ではない。対立する各々の側には守らなければならない立場があるということを理解する話である。」ということだった。ヒーニーはまたナチ・ドイツが制作した『アンティゴネー』とアパルトヘイト時代の南アフリカで制作されたものについても語っている――それらの作品では、両方の側の観衆が、『アンティゴネー』の舞台をその目で観て、自分たちが正当化されていると思った。トムはまた、これらの話題についてディーンとヒーニーに話し合ってもらうというアイディアが気に入った。それで私たちは次第にドキュメンタリーの構想と制作へと向かっていった。

デリーは私には、長老派、英国国教、フリー・メイソン、プロテスタント、カトリックという、時を記す点と線で分割されているように思われた。デリーはまた、第一次大戦の戦死者の名前が刻まれたプロテスタントのダイアモンドが立つプロテスタントの要塞であり、長老派の大通りである。カトリック教徒のテラス・ハウスは包囲された町の壁の外に建っていた。彼らの壁――フリー・デリーの壁――は要塞都市デリーの壁と向き合っていた。アルスターの兵士たちがソンム川に向かって進軍（1914-1918）している時に、ダブリンでは反乱が起こっていた。これがデリーで記念されることはない。

これは、北アイルランドのカトリックの一般庶民で初めて教育を受けた世

代の一例、聖コルンバの申し子たちの話である。彼らが受けたローマ・カトリック教会の教育は、国会議員や作家やミュージシャンの才能を培うほどの幅広いものだった。規律を厳守させる厳しい教育であったが、今日見られるように教育が当然の権利だと考えられることはなかった。この教育に対して人びとは畏怖を感じていた。ヒーニーは近所の人たちのことをこんなふうに書いている。「老人たちが立ち上がって僕と握手してくれた…ささやくような声で見知らぬ人にまで教える。僕が長男で、学校に行っていると。」遠慮とささやきはいかにも司祭にふさわしい。聖コルンバの司祭たちが――給費生でとても聡明な少年――ヒーニーを見て司祭の素質があると考えていたことは確かである。近所の人たちの静かな敬意も彼への期待の表れである。『聖コルンバの申し子たち』の原稿はこの誇りと畏怖と献身のるつぼから生まれたものである。

本書の登場人物のひとりひとりは、視聴者を彼らの背景へといざない、聖コルンバの廊下へと案内する物語を語る力を備えている。しかし彼らの語りが他と違うのは、視点を自在に変える力があるということだ。つまりタカのように舞い上がって鋭く全体を鳥瞰したかと思うと、国際的事件の背景と比較対照する。ディーンは1972年に初めてイギリスの製造業が貿易赤字になったと言っている。そして彼はこのイギリス経済の減退を北アイルランドの政策強化によるものという視点から読んでいる。別のところでヒーニーは、彼の通った小学校アナホリッシュのことを、「20世紀半ばになっても相変わらず19世紀風にやっている学校だった」と言っている。マッカーンはボグサイドの人口ピラミッドが、20世紀のアイルランドというよりも19世紀の産業国イングランドに似ていると言う。こうした北アイルランドの時代遅れの構造と近代化への力を体現した「イレヴン・プラス世代」との関連は数多く見られる。デリーと北アイルランドの歴史にとって重要な転換期――1947年の教育法、1951年にデリーの壁の内側で起こった聖パトリックの日のパレードでの武装警官による弾圧、1968年のデリーで初めて行われた公民権運動のデモ行進に対する武装警官による弾圧、そして1972年1月30日（血の日曜日）な

どは、街や学校で起こっているまぎれもない事件そのものだった。八人の話を特徴づけているのは、それが具体性と抽象性の間を楽々と行き来する語り口である。

1968年にデリーで革命が起こった理由はいくつかある。当時の世界情勢からも分かるように、非暴力の反抗が変化を可能にするというリベラルな希望がデリーにもあった。北アイルランドの産業の崩壊の兆し。かび臭いユニオニスト政治体制と自信に満ちた新世代のカトリック教徒との衝突。これら三つの要素のひとつひとつが選挙の支配的な流れに脅威を与え、またそれがゲリマンダリングにとって脅威となった。重工業の衰退とともにビジネス界の票がかなり不安定なものになっていった。カトリック教徒に教育が広まっていたため、カトリック教徒の中産階級も大きく変貌することになった。その混沌の中から、最終的にはジョン・ヒュームが党首を務めることになる新しい政党が生まれた。ヒュームは社会民主労働党（SDLP）というこの政党の結成に力を貸したのだった。彼は難なくその地位にとどまった。彼は政党政治を越えて活躍し、北アイルランド政治を諸外国に伝える解説者として広く尊敬されている。

ヴィニー・カニンガムが、独創性に富んだ映画『ボグサイドの闘い』と『その先には入るな――三つのデリーの物語』の中ですでに多くの重要な問題点を指摘していたこともあって、ドキュメンタリーを制作し本を書くには、今まさに時機を得ていた。カトリック教徒の国民が、自分たちの状況に対して意識を高めることができるようになった理由を十分に探るために、いわば道はすでに開かれていたのだ。彼らの目標であった完全な公民権――仕事、住宅、すべての人の選挙権――を勝ち取るための運動が起こったのが1960年代の終わりだった。本書は、その革命の根源にあったのが、聖コルンバのような学校で少年たちが受けた教育ではないかということを示すとともに、人びとの関心を、生きてゆくという目先の問題から自分たちの政治状況を十分に理解する方向へと変える力を検証するものである。あの重大な転機の影響は今日でもいまだ尾を引いているように思われる。

イーモン・マッカーンのすばらしい処女作『戦争とアイルランドの町』はもっぱら歴史を扱っている。マッカーンが聖コルンバを卒業した時、偉大な歴史家ツキディデスを原文で読めるほどギリシア語の知識があったということは記憶にとどめておくに値する。このようなことから、（教育を受けたカトリック教徒の心の中にある）過去の歴史の様々なパターンが、デリーでの革命に影響を与えていたのだ。マッカーンは、ギリシアとローマについて学ぶことは、若者の発達にとって非常に効果的だと信じて古典の勉強を熱烈に支持していた。「ローマとギリシアのことを知って得をしない人がいるとは考えられない。」聖コルンバの申し子たちは教育を受けたために、国際情勢——プラハからメンフィスまで——の流れを吸収できた。彼らはそこで見いだしたパターンを自国の政治にあてはめて読むことができたのである。

カトリック教徒が受けていた制限と変化をもたらした原動力——教育——を検証しながら、紛争の解決方法を解明するためにその原因に迫ってみようと思う。カトリック教徒の地位を向上させ、二流という烙印を消させたのは、1947年の教育法であった。本書で紹介した八人は、先駆的な一団となって自分の能力を実現していった。ブライアン・フリールとかマーティン・オニールのような聖コルンバのほかの有名な卒業生たちを忘れていないかと言われるかもしれない。それに対しては、聖コルンバのすべての卒業生を網羅するのではなく、この世代に焦点を絞ることが、私の最初からの意図だったと答えるしかない。

聖コルンバの記録保管所に火事があったが、聖コルンバの（1946年 -1957年の）在学生の記録はひとつも失われずにすんだ。神父のイーモン・マーティンの言葉を借りれば、彼らは「みな火の咎めを受けずにすんだ」のだ。私は、前の聖コルンバの校長であるイーモン・マーティン神父、現校長のショーン・マックギンティ、聖コルンバの公文書保管係のボブ・マッキム、ダーモット・カーリンに話をうかがい貴重な意見をいただいたことを感謝したい。

私はまた、本文全体あるいは本文の一部に最初に目を通していただいた次の方々——キアラン・マーレイ、ジョン・ドーラン、ブレンダン・マックカー

ン、ジェイムズ・シャーキー――にも惜しみなく時間を割いていただくとともに心からの熱い励ましをいただいたことを感謝したい。私はウェスト・パーク・ピクチャーズとマッカンナ・テオランタのおかげでこのタイインの本がたまたまわれわれのドキュメンタリー映画の一部となったことを感謝したい。また次の方々に感謝したい。メアリー・ヘイズ＆シェイ、フェスタス・ジェニングズ、リサ・ハイド、岡崎家のご家族、西村家のご家族、火曜会、トム＆ジェイン・ハッチー、トニー・ドハティ、ガーバン・ダウニー、ロバート・グィン・パーマー、パット・ヒューム、ピーター・ギャラハー、パトリック・ヒーニー、ヒュー・ヒーニー、ディーン・ヒーニー、チャーリー・ヒーニー、エーモン・ディーン、ジェラード・ディーン、ショーン・マックマーホン、ヴィニー・マッコーマック、パディ・マラーキー、ピーター・マックドナルド、ジュード・コリンズ、マイケル・コリンズ、コーム・シャーキー、シャーキー家、クライヴ・オブライエン、リチャード・ドハティ、ケイサル・ローグ、パトリック・マックゴールドリック、エディー・メイホン、ジョン・ウォルシュ、Ｐ・Ｊ・ドハティ、ショーン・クィン、クィン・グループ、シェイン・コナートン、シェイマス＆バーナデット・フィッツパトリック、パトリック・オドハティ、パトリック・マラーキィ、マーゴ・ハーキン、メイヴ・マッカダム、ヘレン・クィグリー議員、ゲラルド・ダイヴァー市長。ショーン・クィンにはデリーでの空撮でヘリコプターを使わせていただいたことを感謝したい。キャヴァン芸術協会にはタイロン・ガスリー・センターで私を支えてくれたことに感謝したい。マイケル・ダーシー、日本アイルランド協会、トリニティ・カレッジ日本人会、アイルランド日本大使館に感謝したい。

私は心から慶應大学の同僚たちに感謝したい。また――私の仕事の宝庫である――慶應大学図書館の職員の方々には多くの援助をいただいたことを感謝したい。

モリス・フィッツパトリック

2010年3月

背景／歴史

アイルランド統治法（1920）によって北アイルランドの国が正式に成立すると、ユニオニストはますますゲリマンダリングをてこにして、カトリック教徒が多数を占める地域を支配しようとした。比例代表制ではその目的を達することができないために、ユニオニストはそれを廃止した。力のない現状維持派の一党独裁政府――ウェストミンスター（英国政府）のあやつり人形――が以後半世紀にわたって北アイルランドを支配した。ゲリマンダリングが最初に力をふるい始めたのはデリーで、カトリック教徒が1688年以来18世紀になって初めて市長に選ばれたときだった。市庁舎の壁には町の議員たちの名前が書かれている。1920年１月、オルダーマン・ヒュー・C・オドハティは本丸である市庁舎になんとか迫ることができたが、それは犠牲の多い勝利だった。これによってゲリマンダリングがさらに強化され、プロテスタントがその数とは不釣り合いなほどの政治的影響力を確実に持つことになった。市庁舎のユニオニストはその後は絶対にカトリックの市長が出ないように画策した。1970年代をまって、やっともうひとりのカトリックの市長が誕生した。プロテスタントが多い国の人口構成を考えると、ゲリマンダリングにこだわる必要はほとんどなかった。しかしカトリック教徒が多数派を占めるデリーは例外だった。当然ながら、1968年にデリーで公民権運動が生まれたとき、その行動計画の中心となるものが選挙制度改革（一人一票）の確立であった。

このような歴史を経ながらも、デリーの市庁舎には両陣営の歴史であふれている。英国王室の王族たちの肖像画と並んで、アール・ヒュー・オドンネルとアイオナの聖コルンバがステンドグラスに彩りを添えている。

ファーマナ州のことについて書かれた本『ファーマナの事実』は、北で行われている差別の実態を的確に説明している。たとえば、カトリックとプロテスタントが学校や郵便局などに同じように就職を申し込んだ場合、プロテスタントが職を得ることになる。プロテスタントは就職に関してはカトリッ

クに比べて5-6倍もチャンスに恵まれている。仕事の割り当てをこのように巧みに仕切っているのはゲリマンダリングというゆがんだ選挙制度だった。

ゲリマンダリングの仕組みは非常に単純な原理に基づいている。ユニオニストの選挙区ではナショナリストの少数派は可能な限り大きくなり、ユニオニストの少数派は最大限小さくなる。これによって確実にナショナリストの「無効票」が最大になり、ユニオニストの有効票が最大になる。（『ファーマナの現実』ファーマナ公民権協会、2頁）

このようなわけでカトリックが大半を占めるファーマナのような州では、選挙区の境界線を引くのに、サウス・ファーマナをナショナリストが圧倒的多数で占め――エニスキルレンとリスナスキア――の他の二つの選挙区ではかろうじてユニオニストの多数派が占めるようにした。これによってユニオニストの二つの選挙区が得票数で必ずナショナリストの選挙区を上回ることができた。この巧みに理論化されたデモクラシーによって住宅政策や職業配分の政策がゆがめられることになった。ゲリマンダリングによって有権者の間にあった溝が明確になった。それは今日まで変わらずに続いている。つまり、選挙になるとプロテスタントはプロテスタントの候補者に投票し、カトリックはカトリックの候補者に投票するというわけである。残念ながらこのようなゲリマンダリングの考え方が今日でも根強く残る地域もある。

テレンス・オニールは本書の歴史的背景にとって非常に重要な人物である。カトリック教徒に対する寛容を主張する彼の政治的包括主義は、1947年の教育法の擁護にもよく表れているが、このために20年後に（サニングデール協定を破棄しようとするペイズリーとその支持者たちによって）政治生命を失うことになった。オニールが公民権を支持するのは教育法を支持する論理的帰結であった。公民権運動そのものも教育法から流れ出たひとつの流れとも言える。またサニングデール協定――数十年にわたる暴力の後に本質的にアルスターが受け容れることになる協定――の起草者の一人であるヒューム

が、まさに教育法のおかげでグラマー・スクールの教育を受けられたのは興味深いことである。この教育は、カトリック教徒が人並みの社会的境遇を訴えることのできる媒体となるものであった。

記録文書の詰まった箱を次々と掘り返しながら、私は聖コルンバが今ブンクラーナに移転したのはゲリマンダリングが原因だったということを知った。学校に行く子どもたちの数が――教育法のためであるが――急激に増え、校地を拡張するためにまわりの土地を買い足す必要があった。土地を買い求めようとしている入札者がデリーの司教の手先であることを知ったユニオニストは、土地を売ることをやめた。（聖コルンバは准神学校だったので、司教との関係は明白だった。）

1951年、デリーで行われた聖パトリックの日のパレードで、ナショナリストのエディ・マッカティアが三色旗を掲げたときに、そのパレードは町の中心部で王立アルスター警察隊の武装警官によって制圧された。その日は、当時のカトリック教徒の状況を表す恐ろしい象徴としてデリーの歴史に刻まれている。この日行使された恥ずべき戦術を記事や写真で報道する新聞はほとんどなかった。しかし、北アイルランドのカトリック教徒の苦しみに対する意識は次第に高まっていった。公民権運動はまだ生まれてはいなかったが、イギリス在住のアイルランド人はすでに北の改革を支持しようと結集し始めていた。デリーでの聖パトリックのパレードを武装警官が制圧した事件はそれほど影響を与えなかった。しかし、だからといってそれが皆無であったと言ったら嘘になるであろう。1950年代のイギリス在住のアイルランド人の支持は、1960年代になって北の公民権運動に刺激を与えたからである。アンソニー・コーランの言葉を借りれば、

> ユニオニストの立場の濫用――土地の所有を参政権の条件とすることやゲリマンダリング、その他…。1950年代と1960年代初めにイギリス在住のアイルランド人が展開したデモ行進――リヴァプールからロンドンまでの12日間にわたる大規模なデモ――は（指導者たちが無視されるよりも警官

になぐられるために立ち上がった）北アイルランドでの公民権運動の前ぶれであった。当時のイギリスには、そのような行動が許される大きな自由があった。それが重要だったのは、公民権運動に火をつけたためだけでなく、成人に達しようとしている北の幅広い教育を受けた世代に、世論に訴えることができる手段の型を示してくれたからである（下線筆者）。それが、イギリスでは自由に表現することを可能にし、北では生まれ始めていたその感情を鼓舞したことはたしかである。北のカトリック教徒とまったく同じように、イギリス在住のアイルランド人は、労働党と手を結ぶことで、自分たちの利益に最もかなうということを知った。

（アンソニー・コーラン『アイリッシュ・マガジン』1988年11月）。

公民権運動はそういったところから力を得ていき、1968年10月５日、ついにそれが形になって街頭に出た。

1950年代と1960年代に入って、大小の造船所や建設工事の仕事はプロテスタントの労働者階級に対する賄賂のようなものだった。その仕事はプロテスタントのために用意されたもので、仕事に恵まれない多くのカトリック教徒にまわされることはなかった。だからその優越感がプロテスタントの労働者階級の支えになっていた。しかし、1960年代の終わりに、たくさんのカトリック教徒が教育を受けると、プロテスタントの主導権のもろい土台にひびが入り始めた。オレンジ党のイデオロギーの支配は、毎年７・８月に行われた無数のデモと、巧みに組織されたピラミッド構造もろとも、新しく台頭してきた力によって奪い取られてしまった。1968年までには、「これらの島々」にさえ無縁の力が影響力をふるっていた。プラハはソ連軍の侵攻に抗議をしたし、アメリカ南部の州の黒人はおとしめられた地位を克服しようとした。この影響力はあまりにも強く、太鼓と軍隊によって抑えることができないまま、アルスターへと広がっていったのだった。そして社会改革が始まったのだ。ディーンはこれを「啓示」と呼んでいる。

イレヴン・プラスによって、それまでカトリック教徒にはまったくなかっ

た職業へのあこがれが引き起こされた。ユニオニストが怖れたのは――マギー大学や新設の大学によって――デリーがますますはずみをつけるのではないかということであった。1966年、デリーのユニオニストは自分たちの町がひどい目に遭うことがわかっていながら、しめし合わせて（プロテスタント主義が勢力を持つ）州の東の方にアルスターの二つめの大学を置いた。これに対してデリーの市民は激しく怒った。公民権運動は実りのない結果に終わっていたが、事態は以前のままというわけではなかった。その頃までに取り返しのつかない状況におちいってしまっていた。

さらにデイリー神父がインタヴューで語っているように、運動家は論争の場に「新しい政治言語」を持ち込み、旧態依然の政治の言葉を偏見に満ちた考えとして投げ捨てた。ディーンは次のように書いている。「政治で使われる言語は文学で使われる言語に比べると、よりゆるやかに色あせてゆくが、それが色あせ始めると、危機を耐え忍ぶ態度に深い体制変化が訪れることを告げるものとなる。」（『市民と野蛮人』1983年、14頁。フィールド・デーのパンフレットより）。

デリーと北アイルランドの歴史の決定的瞬間は1968年10月５日であった。それは北アイルランドの歴史にとってまさに象徴的な日であった。住宅制度と選挙制度の根本的改革が公民権運動の活動家たちの目標であった。マッカーンも組織者の一人である、あの1968年10月５日の、未来につながるような――後年にはもっとひどい事態を引き起こすことになる――デモで、北のカトリック教徒は町から追い出されたとはいえ、実質的な意味では、それは敗北ではなかった。彼らは軍事的には制圧されたが、政治的には、世間の衆目の中で正当化された。反響が広がっていった。この日が公民権運動に多くの人びとが関わり合いになった最初の日となった。この日が北アイルランドの歴史にとって重要な日であることは強調してもしすぎることはない。1947年の教育法の影響力とそれまでに構築されていたユニオニストのアルスターの終焉をかいま見る一瞬であった。

当時のメディアは次のように伝えている。

クィーンズ大学ベルファスト校の学生たちは、10月５日のデリーで公民権運動のデモの時に行われた警官隊の暴行に抗議して３時間半にわたる座り込みを行った。この抗議行動のあと、代表団は閣僚に会うことが許された。代表団は閣僚に対して次のような要求を示した。一人一票の確立。特別権力法、公共治安法および国旗と紋章に関する法律の廃止。国会行政管理官の導入。人権法案の法制化。住宅制度におけるポイント制の導入。選挙区の境界の公正な再画定。10月５日のデリーでの警官隊の暴力に関する厳正な調査。能力に基づいた仕事の割り当て。(「ケイン・ウェッブ・サービス」1968年10月９日)。

フリー・デイリー・ミュージアムのコメントは的を得ている。

決定的要因はテクノロジーだった――そのおかげでアルスターの犯罪行為が白日の下にさらされた。北アイルランド警察の暴行現場をとらえた写真が世界中に配信されたが、強い影響を与えたのは果敢なアイルランド放送協会のカメラマン（ゲイ・オブライエン）が撮った場面だった。彼は、住民が、デリーで北アイルランド警察の行為によって恐慌状態に陥り、恐怖におびえるなまなましい姿をまざまざと記録した。

60年代後半には刺激的な雰囲気が漂っていた。ビートルズ、ローリング・ストーンズ、テレビ、アメリカ黒人解放運動、ソヴィエトのプラハ侵攻。テレビは、デリーのカトリック教徒に、彼らの貧困が世界の他のグループと無関係ではないという認識を広めるのに、きわめて重大な役割を果たした。デリーのカトリック教徒の苦しみは、同じように、世界中の抑圧された多くのグループも味わっているということを示す役にもたった。たとえば、ジェイムズ・ボールドウィンがデリーに住んでいたら、ユニオニスト体制にとっては教育を受けたトゲのような存在だったであろう。アメリカで公民権運動が

行われているときに、テレビでのある白人との討論でジェイムズ・ボールドウィンは次のように言った。

私はこの国の多くの白人の気持ちは分からない。それを理解するには社会の各機関を見て推論する他に方法はない。労働組合と組合の委員長が本当に私のことを嫌っているかどうかは分からない。それはどうでもいいのだ。でも私はその組合には入っていない。不動産業の圧力団体が黒人に反対なのかどうかは知らないが、彼らによってゲットーに閉じこめられていることはよく分かっている。教育委員会が黒人を嫌いかどうかは分からないが、教科書や学校のことは分かっている。今、これが証拠だ。あなたは私に――私の命を、私の女を、私の妹を、私の子どもたちをかけて――誓約をさせようとしている。君がアメリカに間違いなくあるといい、私が見たこともないような理想主義を根拠にしてね。

社会的機関による差別を強調することは印象的だ。北アイルランドの学生の反抗者たちも同じことを訴えた。

産業界のプロテスタントの有力者たちはこの当時、ひとりで25票分も持つことに何の矛盾も感じてはいなかった。仕事を与えてやっているのは自分たちではないか、というわけだった。さらに彼らは、自分たちがそのような力を持つことは、歴史にも裏付けられていると信じていたからだ。ユニオニストの手になる歴史書の多くは、今に至るまで地元の人間を封じ込め、自分たちに都合のいい社会構造を維持することを合法化するためのものでしかない。以下の引用は、カトリック教徒が1960年代後半から町に浸食し始めたことに対するデリーのプロテスタントの男の証言から引いたものだが、「強迫観念」の本質をよく表している。

私たちはまったく孤立していると感じました。でもこの町のプロテスタントは、それまでずっと利用されてきて、この地域を支配するのはプロテ

スタントの住民だとずっとそう言われてきました。しかし、それが突然すべてを奪い去られてしまったのです――（私たちは）すっかりショックを受けてしまいました。そしてもう事態が信じられませんでした。まるで水におぼれた人間が泳ぐこともできず、何もできないようなものでした。パニック状態になり恐怖にとらわれました。（アリステア・シンプソン、ファウンテン居住区。ヴィニー・カニンガム『立ち入り禁止』――フリー・デリー・ストーリー）2006

プロテスタントはこれまで誰に利用されていたのかといえば、自分たちが壁に描いた肖像画の人物ではないか。今でもファウンテンサイドに大切に祀られている――エリザベス二世は、400年前にさかのぼってアルスターを植民地化した君主制の象徴である。アルスターのプロテスタントの男たちはソンムの戦いで利用されたのだった。だが彼らのコミュニティは町の支配を続けた。ただで得た飾り板や彫像は、報酬の一部だった。オレンジ党が勝ち誇って町を行進し、北のプロテスタントの垂れ幕を掲げた様子は、今日のアイルランド共和国に住む同じプロテスタントの穏健ぶりとは対照的だ。境界線が引かれたということは、全島のプロテスタント化が期待したほどには根を下ろさなかったということである。

ボグサイドの住民が1969年に自分たちの区域に非常線を張って「ノー・ゴー・エリア（立ち入り禁止区域）」を宣言したとき、ユニオニストは、分離されて以来初めて、自分たちの居住区が必ずしも保証されるものではないということをまざまざと知らされた。そして結局は、居住区が、彼らにとってアルスターに住むための目的であり、封建的な慣例が自分たちのアイデンティティとしてあまりにもしみ込んでいたために、――ボグサイドは当時境界がはっきりしていたので、888エーカーのボグサイドでさえ――失うことは、ほとんど自分たちの一部、つまり存在理由を失うことに等しかった。彼らの歴史全体は、ある意味で、この比較的マイナーなカトリック教徒の進出によって否認され、歴史をさかのぼってまで台無しにされたのだ。そのため、

カトリック教徒の謀反は彼らにとってはつらいものだった。ある国民が母国によって歴史と伝統という遺産をあまりにも無思慮にはねのけられたとき、その国民たちを鼓舞する原動力が、恐怖とパニックになったとしても驚くにはあたらない。彼らはまた最初からロンドンに利用されていた、との結論を無視することはできない。（デリーをロンドンデリーと呼ぶという）形ばかりの特権を与えられても、根本的な裏切りの苦みを和らげることはほとんど不可能だ。

これらの特権はどうして通用しなくなったのだろう。マッカーンは次のように言っている。

> （1968年）10月５日の余波で、英国政府の政策の主要な方向が北アイルランドの「民主化」へと向けられた。共和国に対する英国の投資が増え、貿易相手国として南の重要性が増すことで――北のユニオニスト党への無批判な支持に見られるような――従来の政府の伝統的な態度は危険なほどに時代遅れとなった。英国とアイルランドの関係の歴史の中で初めて、オレンジとグリーンのバランスをとることが帝国にふさわしいこととなった。これは北に対する英国の政策に必然的に反映された。そのためにオレンジ勢力に対してカトリック教徒への譲歩を迫るという決議がなされた。（『イギリスの新聞と北アイルランド』1972年）

ペレストロイカを彷彿させるこの改革は、1947年以降の新世代である「イレヴン・プラス世代」が成人に達した時期と緊密な関係を持ち、北のユニオニストの支配に対する最も大きな脅威となり、鮮やかに記憶に残るほどのものとなった。それはユニオニストが知らない間に、足もとをすくわれることを示す最初であった。彼らの反応は腹の底で感じるようなものであり、彼らが北にやってきた数世紀前の時代に耳を傾けるかのようなものだった。

グレゴリー・キャンベル議員は（『立ち入り禁止――フリー・デリー・ストーリー』で描かれた）北の爆発の原因を振り返った中で、たとえば政府が、そ

の同じ政府の命令書はボグサイドでは効力を持たないと主張する人びとと対話を始めると、反抗の種が蒔かれてしまうといっている。つまり、なおいっそうの独立獲得と国家転覆の意志が増すというわけである。ここで当然重視すべきことは、３年後にロンドンからの直接統治を予測しながら、1969年に英国政府が英軍を通じて、ストーモントの頭越しにボグサイドとの一連の交渉に入ったということである。キャンベルが指摘し落としたのは、政府を転覆させることが場合によっては望ましいということであった。つまり現状維持は、彼の言う政治家にとっては望ましいが、何十年にもわたってデリーのカトリック教徒たちに不利な条件を押し付けてきたのだった。

だからといって英国の政策とナショナリストの意見がすんなり一致したということでもなかった。そんな前例があっただろうか。1960年代後期に、それまでカトリック教徒たちが味わってきた数々の苦しみが表面化した。それで社会の周辺部で長い間生きてきたナショナリストは、おいそれと英国政府を信じるようなことはしなかった。英国の軍隊は1969年８月14日にはすでにデリーに進駐していた。最初は、ボグサイドの多くの人たちから大きな歓迎を持って迎えられた。これによって当然、王立アルスター警察隊の力をもぎ取ってくれると考えていたのだ。そこの一隊のアルスター特別警察隊（Ｂスペシャル）がじきに解散されることになっていたからである。しかし軍隊はすぐに敵対し始めた。カトリック教徒の市民に対する英国軍の偶発的攻撃は――この先30年間にわたって続いたのだが――IRA の募集の最も有効な手段となった。英国軍の兵士が1999・2000年までデリーに駐屯することになった。彼らがカトリック教徒に加えた暴力は、マッカーンの『戦争とアイルランドの町』に鮮やかに描かれている。王立アルスター警察隊は（後に英国軍にそそのかされて）周期的にボグサイドでクリスタルナハト（水晶の夜）を再現した。これこそまさにフィル・コウルターが書こうとしていたことである。「タンクと爆弾をもって／ああ、なんということか、あんなにも好きだった町にヤツらはなんてことをしてくれたんだ」（下線部筆者）。王立アルスター警察隊はタンクを持っていなかったし、IRA も所有していなかった。コウ

ルターは1960年代後期に英国軍が補足的に供与した武力のことを言っているのだ。

1947年以降の世代は厳しい弾圧のもとで育っていった。アイルランド警察庁の威嚇、聖パトリックの日のパレードの弾圧、裁判なしの留置の脅威などがよくあった。民主国家成立を訴えたいという気持ちが生まれ始めていたが、その後数年を待ってやっと実現への行動が起こった。マッカーンの表現を借りれば、「大企業の利益が国の民主化を要求した――つまりアルスター特別警察隊の解隊、警官の武装解除、差別の撤廃が必要だった。たとえば一例をあげると、国家が転覆されることはその利益にかなわなかった（『英国の新聞と北アイルランド』）。ナショナリストの視点から見れば、ここでは事態はまったくやすやすと納得できるものではなかった。この何年かの間に北で暴力が拡大していった理由のひとつは、ナショナリストが受けた譲歩によって勢いになおいっそうの拍車がかかったことにある。体制の崩壊（根本的な存在理由である少数派の抑圧に永遠に終止符が打たれたという意味での崩壊）の結果生まれた真空状態を、強硬派のものたちが埋めようとせめぎあった。

福祉国家はユニオニスト体制の終焉の始まりだった。なぜなら、封建的社会から近代的資本主義社会への移行を余儀なくさせられたからである。北で様々な暴力事件が起きていたにもかかわらず、事態沈静化の懸命な試みもゆるやかではあるが慎重に行われていた。結局、ヒュームの政党（SDLP：民主自由党）の設立とともに、あの歴史的な超党会議が1973年にサニングデールで始まった――そして12月には協定が調印された。サニングデール会談の後、ダブリンはロンドンと協定を結んだ。ペイズリーの支持者たちは、サニングデール協定を撤廃させるストライキを組織するうえで中心的な役割を果たした。ペイズリーはまた、1969年に「一人一票」を認めたテレンス・オニールを攻撃目標としたのとまったく同じように、ブライアン・フォークナーの追放運動を展開した。

プロフィール

エドワード・デイリー司教

デイリー司教は1933年、ファーマナ州ベリークに生まれた。戦後、寄宿生としてデリーの聖コルンバに学んだ。ローマで司祭の修行をして、アイルランドに戻ったあとはボグサイドの助任司祭を務め、後にデリーの司教になった。デリーの名誉市民であり、「エディー・デイリー」と呼ばれるほどに人びとに親しまれている。これまでずっと、公民権獲得や、不当に投獄されたり告訴されたりした人びとの正義のために、全力を尽くしてきている。

ジョン・ヒューム

ヒュームは1937年にデリーの労働者階級の子どもとして生まれた。当時、デリーの労働者の住宅事情はヨーロッパで最悪だった。1948年、第1回のイレヴン・プラスの試験に合格した。メイヌース（の神学校）で学んだあと、教師となって聖コルンバに戻った。別の時代に生まれていたなら、彼は母校でずっと教えていたであろうが、北アイルランドの紛争のために彼は政治へと向かっていった。彼の有名なスローガンは「我々は汗を流すが血は流さない」である。

彼は北アイルランドの歴史上最も不安定な時代の注目すべき国会議員であった。演説家として、また交渉役としての彼の卓越した才能は、彼の人間的魅力と謙虚さと相まって、多くの人びとに称賛された。アメリカ大統領ビル・クリントンは、和平交渉の時には彼と緊密な関係を持ちながら行動した。ユニオニストの指導者デイヴィッド・トリンブルとの1998年のノーベル平和賞同時受賞は、かつては解決困難だと思われた状況が解決に向かっていることを象徴するものとなった。

ヒュームは北の平和を取り戻すために一生を捧げてきている。彼の目標は常に平和主義でありかつ、政治的に対立する両陣営に対して敬意を払うことである。

スコットランドの長老派の血も引くジョン・ヒュームは、ごく若いときから、経済が、国民を変え人びとを団結させる大きな力であることを理解していた。ノーベル賞受賞のスピーチで、彼は第二次大戦後のフランスとドイツの和解からインスピレーションを受けたと語っている。彼がこれをはっきりと理解したのは、彼が（ジェームズ・シャーキーが後に大使として赴任することになる）ストラスブールにいたときだった。この都市は、20世紀の仏独関係が難産ながらも生まれたあと、この二文化の中で独自性を発展させた都市である。

シェイマス・ヒーニー

シェイマス・ヒーニーはデリー州の南部の小さな農家で生まれ育った。彼の大学での出世は早く、20代でクィーンズ大学で教鞭をとった。ハーヴァード大学で講義をし、オクスフォード大学の名誉ある詩の講座を5年間担当した。彼の詩は世界的に有名で、未来への道を灯すものとして多くの人たちに賞賛されてきている。彼の作品は数多くの外国語に翻訳されている。1995年にノーベル文学賞を受賞した。

シェイマス・ディーン

ディーンはボグサイドに生まれた。彼はケンブリッジ大学でヨーロッパ啓蒙時代の専門家になった。ペンギン社のジェイムズ・ジョイスの作品の編集長を務め、同時に『フィールド・デー・アンソロジー』の編者でもあった。その学問的洞察力は世界的な評価を受けている。彼は多くの本やパンフレットを書いている。インディアナ州のノートル・ダム大学でアイルランド文学の講座を担当した。また詩集を4冊出している。子ども時代を描いた小説『暗闇で読む』は1996年のブッカー賞の最終候補に選ばれた。今日のアイルランドのもうひとりの一流左翼思想家イーモン・マッカーンと同様、シェイマス・ディーンはこの世代の国際的側面に対して多大な貢献をしている。

イーモン・マッカーン

イーモン・マッカーンもボグサイド出身者で、作家や社会思想家として名を広めている。彼は10月5日の公民権デモと「ボグサイドの闘い」の首謀者のひとりだったが、これらの事件がきっかけとなって――60年代後期に世界を震撼させた事件――「デリー解放運動」が起こった。英国軍による数多くの残虐行為の目撃証人である。このため彼は――血の日曜日の調査である――サヴィール裁判の貴重な報告者となった。彼はこの事件について、またこれに関連する多くの本やパンフレットを書いた。新聞のコラムニストとして有名であり、BBCとアイルランドのテレビ番組によく出演している。マッカーンは「人生で愛国心を感じたことは一度もない」と言っている。彼は常に社会主義モデルに基づいた万人の平等を行動のモチベーションとしている。

フィル・コウルター

コウルターはデリー市の聖コルンバの近隣ビショップ・ストリートのはずれの出身である。父親は王立アルスター警察隊の警官だった。彼は幼い頃からすばらしい音楽の才能を見せていた。クィーンズ大学在学中に、隠れていたソングライター（作詞作曲）の才能が注目を集め始めた。彼が初めて大きな躍進を見せたのは、1967年、彼の歌「パペット・オン・ア・ストリング」がユーロヴィジョンのコンテストで優勝したときだった。彼はまた「コングラッチュレーションズ」も作曲し、翌年の同じ大会で2位を獲得した。彼はエルヴィス・プレスリーのために「マイ・ボーイ」も作曲した。プランクスティ、トム・ジョーンズ、ヴァン・モリソン、ローリング・ストーンズとも共同制作している。彼の作品のうち約23はプラチナ・レコード、39がゴールド・アルバム、52がシルヴァー・アルバムとなっている。

フィル・コウルターの歌詞は「明日、再び平和を」と歌っている。この感情が彼の生い立ちと彼の父親の――王立アルスター警察隊の警官という――職業を思い起こさせることは確かである。

ジェイムズ・シャーキー大使

ボグサイドに、同じ世代に生まれたジェイムズ・シャーキーは、26歳で外務局に入った。44歳の時にアイルランド史上最年少の大使のひとりとなった。彼の赴任地はオーストラリア、スカンディナヴィア、ロシア、アメリカ、イタリア、アメリカ、日本、スイスである。

彼は赴任した先々で、華々しい経歴の足跡を残した。オスロや東京のメイン・ストリートで行われる聖パトリックの日のパレードは彼の主導のもとに始められた。彼はまた訪れた先の国々の多くの文化について本を出している。彼は世界中の国々に住み、数か国語をあやつる。アメリカのティップ・オニール（下院議長）は彼の業績について本を書いている。

ポール・ブレイディ

ブレイディはティロン州のストラベイン出身である。十代の頃にすでにアイルランドで歌手として名前を広め始めた。プランクスティのアンディー・アーヴァインとの共作アルバム（1976）で彼は一夜にして国際的スターダムにのし上がった。それ以降彼のワールド・ツアーのチケットは売り切れ、アルバムは30週に渡ってアイルランドのチャートに残った。彼は多作のソングライターでもある。最もよく知られた歌は、おそらく、ティナ・ターナーが歌う「パラダイス・イズ・ヒア」であろう。

聖コルンバの申し子たち

アンソニー・C・マックフィーリ神父（聖コルンバの校長、1951－59）はサムというあだ名をつけられていた。また、頭が禿げていたので「ドーム」というあだなでも知られていた。ある卒業生は彼のことを「厳しいけれどフェア、神父だがないのはヘア」と表現した。生徒たちはよくこう言っていた。

ドームが見える
ドームにも見られる――
天井桟敷に上っても。
僕にそそぐ
光が
天井桟敷の
ドームにもそそぐように

「聖コルンバの申し子たち」八人の証言を再現する本書のこの章を、総括的なイメージで始めるのはふさわしい。学校と教会がひとつの機関のように調和し、神父やアイルランドの未来の指導者になりそうな少年たちから目を離すことはめったになかった。校風を強要するために、学校には独裁的な指導者がいて、厳しい処罰があった。「ま、そういう時代だったんだ…」と多くの人たちは考える。たしかにその通りだった。だが、それだけではないのだ。聖コルンバは――地理的にも政治的にも――ある独特の状況に置かれた学校で、ある大きな変化を急激に経験した学校だった。この変化は学校の卒業生たちの証言にも具体的に表れている。

エドワード・デイリー

聖コルンバの寄宿生はたいてい通学生よりも体が大きかったが、その理由のひとつは、彼らの多くが、グルメとは言わないまでも、食糧が豊富な農家で育ったからであった。食料不足が社会経済的理由によるなどということは、農家育ちの11歳の少年にとってほとんど理解できないことだった。実際――寄宿生活を始めるにあたって受けたショックに追い打ちをかけるように――食べ物が十分になく、クリスマスまでその状態が改善される見込みがないということはかなりのショックであった。アイルランド共和国から来ていた寄宿生は、13歳でグラマー・スクールに入っていたので、同僚のデリー市の通学生よりも平均して２歳年上だった。これから子どもを寮に入れようと思っている母親は、寄宿生活を送れば子どもが規則正しい生活が身につくと考えていた。たとえば農家の息子の場合、夕方に農場の仕事をするよりも勉強をすることになるだろうということだった。寄宿生と通学生の違いについてデイリー司教はこのように書いている。「自分たちは、もちろん、通学生よりも優秀だと考えていました。でも、同時に、彼らのことをとてもうらやましく思っていました。（『王国を求めて』62頁）寮の規則は厳しかった。寄宿生の夕方のスケジュールは次の通りである。５時－５時55分、勉強。５時55分－６時５分、たばこ休憩（上級生の寄宿生には喫煙室があった）。６時５分－７時30分、勉強。７時30分－８時30分、夕食。８時30分－10時、勉強。

戦後聖コルンバに通ったある卒業生は、学校はかなり公平だったことを思い起こして次のように言っている。

> 私たちは正義についての抽象的な考えは持っていませんでした。現実をただそのまま受け入れていただけです。マラーキー兄弟のトムとパディ、シェイマス・ヒーニーは私よりひとつ年下でした。寄宿生の間の仲間意識は強かったですよ。1950年にはまだ配給が行われていました。南の寄宿生の寮費は年間50ポンドでした。

1947年、寄宿生はおよそ300名、通学生は200名いた。学校の諸条件も毎年少しずつ改善されていって、1947年以降は奨学金の全額支給、ないしは一部支給が行われるようになった。全額支給は寮費と授業料の両方が含まれていた。北アイルランドの生徒は授業料を払う必要はなかった。共和国の生徒は払わなければならなかった。この時代の寄宿学校が厳しかったということは疑いの余地はない。聖コルンバの寄宿生に許された唯一の贅沢は散歩だった。「ザ・ウォークス」として知られた散歩は瞑想の訓練（瞑想しながらの運動）のためとされていた。

聖コルンバでは規則は絶対だった。1950年代にデリーにサーカスが来たとき、寄宿生の何人かがこっそり抜け出て見に行った。彼らが見つかると、その無断欠席は国際事件となった。大変な騒ぎになって、彼らは退学させられた。親たちが嘆願したが、学寮長の決定は覆せないものだった。当時はそれが普通だったのだ。（むち打ちや絞首刑が受け入れられていた時代だった。）だがこの世代がこの厳しい管理体制を生み出したのではなく、前から受け継がれたのだということは忘れてはならない。中等教育はその頃まではなかなか受けられなかったため、学校の教職員は生徒に対して厳しい懲罰を与えることが許されると考えていた。デリーの市民は温和で寛大であったので、寄宿生がよそ者と感じることはなかった。そこにもデリーの品位というものがあったのだ。つまり凶暴な事件が起こると、デリーの市民は弱者をかばった。若い新米の先生はあまり体罰にたよろうとはしなかった。

通学生は放課後ジョニーズ・ショップでたばこを買った。通学生はほとんどがデリー市出身だったので、通学生と寄宿生の違いには党派的な要素があった。学外では、町で聖職者たちや先生に会うと、授業時間外なのに、軍隊式の敬礼をした。（教師であれば、どんなに厳しい教師でも返礼した。）

寄宿舎での生活環境の厳しさに加えて、取り入れられた教育方法もかなり暴力的だった。聖コルンバの卒業生と話をしたとき、66歳になる今でも、アイルランド語の試験が近いことやアイルランド語の先生に暴力をふるわれる夢を見る、と言った。同じように、デリー市に車で行ってクレイガヴォン橋

を見ると、いくぶん気が沈んで、聖コルンバの恐怖感に襲われるという人もいる。上級生の監督生が土曜日に「ザ・リブズ」（図書館）に集まって慎重に選び出した生徒たちに体罰を行った。

寄宿生は「クルチー」だった。（「クルチー」という言葉は、メイヨー州の小さな町「キルチマー」からきていて「救いようのない田舎もの」を意味する。）寄宿生は、今日に至っても社交的で人づき合いのいいことで知られるデリー出身の生徒たちにとっては、まったく新しい存在だった。通学生はクレイガヴォン橋の向こうに行く習慣がなかった。共和国からの生徒はアイルランド語の基礎知識があった。彼らは聖コルンバのやり方に順応しなければならず、決してその逆はなかった。カリキュラムは北アイルランド政府によって決められていたので、アイルランド精神がカリキュラムに影響を与えることはなかった。

デイリー司教が寄宿生として過ごしたときから、その数年後にヒーニーが聖コルンバに入学してきたときまでの間でさえも、小さな改善があった。たとえば、その時代までには、聖コルンバの生徒たちはハロウィーンには3日間休むことができるようになっていた。寄宿生が初めて聖コルンバから定期的に出られるようになったのは、デリーにプールが出来たときだった。

ローマで研修を終えたあと、デイリーは北に帰り、1962年にボグサイドで助任司祭の任務に就いた。これは彼がこれまで経験したことのないデリーだった。デイリーが直面したボグサイドは、インタヴューで言っているように、若い助任司祭にとって驚くべき世界だった。家族は大家族だった。一家族に15人の子どもがいることも珍しくはなかった。オドハティというある家族は――屋外トイレ付きの四部屋で二階建ての家に――21人もの子どもがいた。デリーはまた逸話にも事欠かなかった。ケルティック・チッピーはデリーで神話化された店だった。オーナーのブレナンはとてもおいしい「フィッシュ・サパー」（の呼び名でデリーで今日まで知られているもの）を売っていた。何マイルも離れたところから人びとがこのフィッシュ・アンド・チップスを買いに来た。彼は「ころも」のレシピを秘伝のままに墓場に持っていっ

てしまった。

ボグサイドはとても多様性に富む地域であった。後にボグサイド地域として区分されたいくつかの区域の人たちは、1950年代や1960年代にボグサイド住民だと言われたら不快に思ったことであろう。きちんとした家庭は――教育、社会的ふるまい、信仰の維持（義務の遵守）など――あらゆる面で高い規範を守っていた。ボグサイドの中流階級の人びとは紛争がはじまるとたちまち出て行ってしまった。イレヴン・プラスが実施される前までは、学費が労働者階級の子どもたちの就学の壁になっていた。1947年以降でさえ、子どもを学校に行かせるよう労働者階級の親たちを説得するのは容易ではなかった。このインタヴューでデイリーは、ボグサイドにテレビが入ってきた重要性について詳しく述べている。マックデイド一家はボグサイドのある区域で最初のテレビの持ち主となった。一家は窓を開けて、人びとが通りからテレビを見られるようにした。ボグサイドは昔も今もとても開放的なコミュニティである。出産のときには、近所の女たちはみな、お産の女性の家に押し寄せた。男たちはあわてて逃げた。助産婦はたいてい間にあったが、多くの普通の女性は問題なく自分で子どもを産むことが出来た。この時代の赤ちゃんはみな自宅で生まれた。病院での出産が流儀のようになると、婦長は命をかけて親戚以外は絶対病院に入れようとしなかった。

サッカーはボグサイドの文化と切り離せないものとなった。ボグサイド出身のあるサッカー選手は北アイルランドの分裂を回顧して次のように語っている。

> 僕の町は超ナショナリストだったが、（プロテスタントが多く住む町）コールレインでサッカーをやって帰ってきても全然問題にされなかった。コールレインで十代の頃に僕は、同輩がまだ出会ったことのない文化に触れたんです。友だちが出来て、今でもつきあっていますよ。

彼はまた、その町のユニオニストのベイシル・マックファレル卿が有名な

歌手を呼んで個人的に歌ってもらおうとしたということを憶えている。歌手の家族は――そのサッカー選手の家族より前に――お礼として、すぐに家を手に入れることができた。しかし歌手の家族は仲間の面倒を見ることを忘れなかった。サッカー選手一家を、家を割り当てられるまで泊めてあげたのだ。

聖コルンバでは、ゲール体育協会（GAA）とサッカーの分裂は際だっていた。学校はどんなスポーツ精神を支援するのかについて断固とした意志を示した。全アイルランド・スポーツのゲール体育協会が称揚されて、サッカーは軽蔑された。この時代、サッカーはデイリーのような聖コルンバの寄宿生には許されなかった。

ゲール体育協会の「舶来スポーツ」禁止は、特に北では、ベルファストのユニオニスト偏重のメディアを映し出す鏡だった。インタヴューのなかで、デイリー司教は、若い頃にはBBCがゲール体育協会のスポーツを放映しなかったと言っている。一方の頑固な偏狭さがもうひとつの偏狭さを誘発したのだ。

MF：あなたが育った場所について少しお聞かせくださいませんか。

ED：家族が住んでいた家はファーマナ州のベリークの村をちょっと出たところにありました。現在のアイルランド共和国と北アイルランドの国境からおよそ百ヤードのところです。アーン川が、当時も今も、ファーマナ州とドニゴール州の境界となっています。そこは――まあ、ちょっと寂しいところですが――子ども時代を過ごすにはすばらしい所ですよ。やることは――サッカー、つり、ウサギ狩り、読書、農場や店の手伝いなど――いっぱいありました。ラジオ・エイリアンはとてもよく入りましたが、BBCはだめでしたね。近くのバリシャノンに映画を見によく行ったものですよ。母に音楽を習いました。それから第二次世界大戦が始まり――子どもや疎開者がベルファスト、イングランド、スコットランドから到着し始めました。英国空軍（RAF）はベリークとエニスキレンの間にとても大きな空軍基地を造りました。そして同

時にアーン湖には水上飛行機の基地を造りました。それは若者にとってはほれぼれするようなものでした。地上基地の飛行機だけでなく、何十機という水上飛行機、サンダーランドやカタリーナがずっと頭上を飛んでいました。デバレラがいう「ドニゴール回廊地帯」の真下にいたのです。もっとも私たちは何年もあとになってやっとそれを知ることになったのですが。ベリークとエニスキレンの間には何千ものアメリカの兵士が駐屯していて、ヨーロッパでの軍事行動に備えていました。戦車や戦争や戦いのための設備の一切が普通に見られました。小さな少年にとっては、それはとても興奮してわくわくするような子ども時代でした。

それから中等学校に行く年齢になりました。私は入学試験を受けて、聖コルンバ校に行くことになったのです。

MF：聖コルンバに入学したのは1946年のことですね。そこであなたが受けた教育についての評価はどうですか。

ED：もちろん、教育は良かったですよ。すばらしい先生もいましたからね。学術的なもの、フランス語、ラテン語、数学、英語をたくさん教わりました。しかしその一方で人生についてはほとんど教えてもらうことはなかったですね。

MF：1947年の教育法は聖コルンバにどんな変化をもたらしましたか。

ED：1947年に教育法が施行されてから、通学生と寄宿生の数は激増しました。あとになって、それが北の社会的・政治的生活に与えた影響がとてもよく分かりました。しかし戦後の厳しい配給制度の時代にあって、私の第一の社会的関心は空腹から逃れることでした。家からまた差し入れの荷物がくるだろうかと心配しながら待つことであり、次の休暇を心待ちに待つこと――そして厳しい罰を受けないようにすることでした。聖コルンバで、寄宿生として、実際に身につけたことのひとつは、

サバイバルの方法でした。生徒の多くは恵まれていて、デリーに親戚があり、訪ねてゆくことも出来たでしょう。でも私にはそういうこともなく、とても寂しい時代でした――寒く、心細く、ひもじかったという思いは今も消えていません。――私の人生でもあまり幸せな時代ではありませんでした。当時の状況を今思い描いてみようとしてもとても出来ません。でも大変な時代だったのですが、あっという間に大人になったというのが実感です。

MF：司祭になった頃のことについて聞かせていただけますか。

ED：1957年に司祭になってから、ティロン州のカースルダージへの赴任を命じられました。そこはとてもおもしろいところでした。北アイルランドの生々しい政治的・宗派的分裂を生まれて初めて経験しました。町はまっぷたつに分かれていたからです。当時、その地域にはかなりの緊張感がありました。私が到着する直前に選挙運動があり、その余波が残っていたのです。まだ過敏なところが残っていました。それは私の人間的形成期でもありました。地元の人びとは気持ちがいい人たちで、いろいろなことを教えてもらいました。赴任しているあいだに政治的緊張感は和らいでいきました。私はプロテスタントの人びととたくさん接触することもできました。ショーやコンサートや演劇――演劇団体のようなもの――にも携わりました。そのような形で人びととコミュニケーションをとることはすばらしいことでした。それは一緒に仕事をし、同時に様々な友情関係を築き上げるにはすばらしい方法でした。

MF：デリーに戻っていらしたのはいつですか。

ED：1962年の５月です。聖ユージーン大聖堂の助任司祭を命じられたのです。そこで1973年６月までいましたが、その間はとても劇的な時代でした。

　デリーについて印象に残っていることはユーモアのあるところだと

いうことです。おどろくべきウィットがありました。あちこちの家を訪ねて人びとと話をして、知り合いになり、また自分のことを知ってもらうのは本当に楽しいことでした。

当時私に任されたところはボグサイドでした。今からすると、当時のボグサイドは比較的狭い地域でした。その後人びとの気持ちの中では巨大化してきてはいますが、あの頃は、まったく小さなこじんまりとしたところでした。この地域はウェリントン・ストリート、ネルソン・ストリート、ボグサイド、カーライル・プレイス、ロスヴィル・ストリート、ファーン・ストリート、ジョセフ・ストリート、フォクスィーズ・コーナー、パイロットツ・ロウ、エデン・プレイス、アダムズ・クローズ、チェンバレン・ストリート、ハイ・ストリート、ハーヴェイ・ストリート、アビー・ストリート、フレデリック・ストリート、ユニオン・ストリート、トマス・ストリート、アン・ストリートからなっていました。そこにはものすごい数の人びとが住んでいました。まったく想像できないほどに超満員でした。アイルランドでは人間がそのような状況の中で生活しているなどとは夢にも思っていませんでした——20人の家族が四部屋の家に住んでいるのです。とても信じられないような状況でした。ボグサイドで私の記憶に残っているひとつのことは家がベッドであふれているということでした——二階と一階はベッドでいっぱいでした。人びとはひとつの部屋で生活し、家族を育て、料理をし、体を洗い、眠っていたのです。どうやって暮らしていたのか、私には分かりません。裏庭に蛇口があって、家の中には水道はありませんでした。お湯が——おむつを洗ったり、料理をしたり、体を洗ったりするために——必要なときにはいちいち沸かしていました。トイレは外でした。でも人びとは、特に女性は、りっぱなものでした。私は女性たちの親身の気持ち、機嫌のよさ、子どもたちへの愛情にはとても感心しました。女性はまた大黒柱であり、工場で働いていました。私が経験した最も劣悪な状況のひとつは、フォイル・ストリートの

ちょっとはずれのシティ・ウォールあたりの向こう側のイースト・ウォールにあるところでした。そこには一生忘れられない建物がありました。そこには20家族が住んでいたに違いありません。衝撃的な状況でした。大きな共同住宅で、まったくむかつくほどの臭いが立ちこめていました。

人びとがこのような状況の中で暮らしているというのは偶然ではなかったのです。これは政治的な理由によってもたらされたものなのです。人びとがこのような状況の中で生きることを強いられたのは、町のある特定のグループの権力や権威の維持を容易にするためでした。私は少なくとも年１回、自分が住んでいる区域の、ボグサイドの家を一軒一軒訪ねました。また場合によっては毎年、何度か訪ねたこともありました。すばらしい人たちでした。

MF：ボグサイドの政治的理由についてもう少しお話しいただけませんか。最終的には何がボグサイドを変えたのでしょうか。

ED：あの地域は、少数派が自治体、つまり市議会の支配を維持してゆくために、ゲリマンダーによる選挙区域になっていました。ジョン･ヒュームはパディ・「ボグサイド」・ドハティおよび町の有志の人たちと団結して消費者信用組合を設立しました。これによって人びとは、社会悪のひとつであった金貸しから解放されました。それに続いて、デリー住宅協会を設立しました。これによってまた、住宅に関するユニオニストの支配を打ち壊したのです。60年代初期と60年代中期のことでした。それがこの町のあらゆることに突然影響を与えるようになったのです。1947年の教育法で育った最初の世代――イーモン・マッカーン、ジョン・ヒューム、そのほかの多くの人たち――が大学を出ると、ボグサイドに住む人びとの不満を、その住民にもメディアにも理解できる言葉ではっきりと語ることが出来るようになっていました。1960年代にはテレビがデリーに入ってきました。人びとがテレビを持つよう

になり、それはボグサイドの人びとにとって文字通り世界への窓だったのです。

彼らは、世界中の人びとは、自分たちが経験しているような状況の中で生きているわけではない、ということ、そしてこれは常軌を逸した尋常ならざることなのだということに気がついたのです。ジョン・ヒュームやイーモン・マッカーンなどのような人びとは、一般の人びとが即座に共感できる不満をはっきりと語ったのです。彼らはその不満について抗議しました。すると、この巨大な政治的権力に立ち向かうという雰囲気が次第に強くなっていったのです。彼らは拝跪を潔よしとせず、そこから立ち上がったのです。1960年代、マーティン・ルーサー・キングの公民権運動が、暴力を伴わない革命や抗議が可能だということを実証してくれたのです。というのは、それまで革命や抗議が人びとに押さえられていたからだと思います。抗議を始めたら暴力はつきものだし、それは1920年代（アイルランド内戦、1922－23）の時と同じでした。ボグサイド出身で大学を出たばかりの、知性に優れ、きわめてはっきりと意見を主張できる人たちがリーダーシップをとったのです。彼らはまったく新しい政治的な言葉を話し始めました。そしてそれが大衆からの反応を呼び起こしたのです。

MF：教育を受けたカトリックのこの新しい世代はどうやって自由をもたらしたのですか。

ED：私の考えでは教育こそが自由なのです。教育を受けて、考えることができ、自分たちの不平をはっきりと言うことができる人びとは、教育によって解放されているのです。地元紙としては、主な新聞は『デリー・ジャーナル』で、『ロンドンデリー・センティネル』もありましたが、両方ともとても保守的で、あまり波風を立てないようにしていました。この町にはテレビ放送局はありませんでした。すべてがベルファストを中心に動いていて、ベルファスト全体がユニオニスト一色といって

いいほどでした。メディアに対して突破口を開いたことがきわめて重要だったのだと思います。これによって初めて民衆の声が聞かれるようになったからです。本当の意味での突破口は1968年10月５日のデモ行進でした。そこで起こったことを聞いて私は激怒しました。その夜ここデリーで暴動が起こりました――デリーで初めて私たちが暴動を起こしたのはその土曜日の夜だったのです。人びとは立ち上がって言ったのです。「もうこんなことは許さない。市民権は平等であるべきだ。」人びとは企業絡みの票やここでのゲリマンダーの構造すべてを攻撃しました。当時はそれをとことん攻撃したのです。

私は最初のデモには参加しなかったものの、68年代後半のデモにはすべて参加しました。実際、参加者は暴力の首謀者というよりも、暴力の被害者だったのです。確かに、彼らは、当時、ウィリアム・クレイグのような人が法的に侵入禁止であるという地域でデモをしていました。しかし自分たち自身の町でデモをしていたのですよ。

私は今でも、その前に反抗の狼煙を上げなかったことを恥ずかしく思っています。私たちは1960年代にはまだまだ、目上の人への敬礼代わりに前髪を引く程度の未熟者でしかなかったのです。目の前に現れて私たちを自己満足から目を覚まさせるためには、イーモン･マッカーンやジョン・ヒュームのような人びとが必要でした。イーモンの言葉を借りれば、私たちを拝跪の姿勢から立ち上がらせるためには、ということですけどね。

MF：非暴力主義の抵抗は結局暴力を誘発するという――コナー・クルーズ・オブライエンが口にした――批判についてあなたはどのように思われますか。

ED：大変むずかしいですね。つまり、どうすればいいかということなのです。何もしないのですか。ただ傍観して、人びとがこのような状況に生きて、不当な扱いを受け、屈辱的な境遇で苦しむのを見ているだけでいいの

ですか。この人たちが声を上げるのを少しばかりためらうのは、1916年から1921年の間に起こったような――暴動とそれに続く内戦といった――状況が再び勃発しかねないということを怖れたからです。しかし同時に、これはあまりにも深いあまりにも不当なことであるので、目をそらすことはできなかったのです。

しかし反対運動をする場合、それがどんな状況であれ危険を伴うものですし、政府権力の強烈な抵抗もあるのです。それは圧倒的な力がてこでも動かぬものにぶつかるということでした。そして何かが崩れ始めていたのです。そしてそのような出来事の場合には、人びとは皆ますます頭に血が上るのです。それがここでまさに起こっていたことでした。デリーで――住宅、選挙、地方自治体の市議会の閉会などについて――公民権運動がほぼその目的を果たそうとしていましたが、それにもかかわらず暴力へと転がり込んでしまったのです。代々にわたってたまってきた不満が堰を切ったようにわき出したのです。傷はあまりに深くまた、王立アルスター警察隊に対する憎悪がじわじわと激しさを増し――不承不承の敬意が――突然大きな敵意に変わったのです。私たちは渦の中に巻き込まれてしまったと言えるかもしれませんね。

MF：この紛争が勃発した一番初期の頃で、サミー・デヴィニーが関わった事件は覚えていますか。

ED：彼は自分の家の中で恐ろしくなぐられましたよ――サミーのことは何年も前から知っています。彼は地元の葬儀屋で働いていました――彼はおとなしくて、人に害を与えるような男ではなかったですよ。覚えていますよ。あの事件の後ほんの15分後には彼の家にいましたからね。殴られたあとが黒や青の痣だらけとなってひどい状態でした。なんて残酷だったでしょう――まったく無実の男だったのに。ほんとうに恐ろしかったです。

MF：フィル・コウルターの「とても好きだった町」が当時のデリーの姿を描いています。あの歌をどうお感じになりますか。

ED：フィル・コウルターの「とても好きだった町」は1970年代中庸のデリーの雰囲気をとてもよく表現しています。その雰囲気を、すばらしく、とてもまねのできないやり方でつかんでいます。ルーク・ケリーが歌うと、いつも新たな次元からの解釈が付け加えられるのです。彼は怒りに表現を与えるのです。

　フィルが目指しているものにとても共感がもてます。1960年代にフィルがまだ十代のころから――よくパーティで彼の家に行っていたので――知っていますよ。とてもすばらしいパーティでしたよ。

MF：寄宿生として受けた教育についてどのようにお考えですか。

ED：自宅通学で中等学校へ通い、家で勉強し、十代で社会生活を送れるなどということができる今日の若者がうらやましいですよ。ファーマナで育った私たちにはそんな経験はありませんでしたから…残念です。でも私たちの時代にはほかに選択はなかったのです――中等教育を受けたかったら家を出なくてはならなかったのです。生まれ変わって息子や娘がいたら、寄宿学校には絶対行かせませんよ。あまりにも多くのものを奪ってしまうからです。

MF：この時期に聖コルンバがこんなに多くのすばらしい頭脳を持った人たちを輩出したのはなぜだとお考えですか。

ED：まず第一に、すばらしい先生がいたからです。それに地方出身の人と都会出身の人が日々交流し、毎日、一日中、一緒に授業を受けていたからだと思います――特に50年代初期と中期に聖コルンバで起こっていた一種の化学反応ですね。二つの文化の融合だったと思いますよ。1947年の教育法のおかげで、教育が与えうるものすべてを手に入れる

という経験ができた初めての世代の人びとだったのです。彼らは――中等学校に行き、さらに大学に行き、その潜在能力のすべてを実現するために――能力いっぱいまで教育を受けたのです。彼らはそのコミュニティから、それぞれの家族から、そのような経験をした初めての世代だったのです。ボグサイドのようなところで生活をするという経験は非常に強烈な教育経験でしたが、それが学校教育と、アイルランドの様々な生い立ちを持った子どもたちと結びついたのです。それでこの化学反応が起きて合成に至ったのだと思います。

MF：移り住んだ第二のふるさとで信仰を説き続けましたね。

ED：あの時代を生きることができてほんとうに恵まれていたと思います。めったに得られない経験でした。後半の、紛争がますます悪化し、さかんにCSガスを使い始めた71年以降、私は老人たちの避難を手伝うために、ボグサイド、特にロスヴィル・ストリートにいつもいることにしました。

MF：1972年１月30日の、いわゆる血の日曜日の記憶を話していただけますか。

ED：詳細については、何回話したかわかりません。あの日、職業軍人の兵隊である、重武装のイギリスの落下傘兵が20分もたたない間に13人の罪のない非武装の人びとを殺し、その他多くの人に重傷を負わせました。この恐ろしい犯罪は、新聞記者、テレビやラジオのレポーターやカメラマンを含む何百人もの人たちみんなの前で行われました。部隊長の一人は勲章をもらいました。告発された人は誰もいませんでした。つまり、その日の午後の話でしかないということなのです。